



越尾 圭さん (生路)

小説家

プロフィール

第17回「このミステリーがすごい!」大賞の隠し玉(受賞には及ばなかったが、編集部が推薦する作品)として、2019年に「クサリヘビ殺人事件-蛇のしっぽがつかめない」(宝島社)で小説家デビュー。現在、ミステリー長編小説を6作品出版している。



「本格的に小説家を目指したのは36歳のとき。それまでは小説家になりたい!とは思っていませんでした。漠然と創作活動に関わる仕事をしたいと、大学卒業後はゲームソフト制作会社、編集、プログラシオン、インターネットサービス会社で働いていました」と話す越尾さん。人生で3回、小説を書くきっかけがあったという。

人に読んでもらう楽しさを知りました。

2回目は20代のとき。

「友人がリレー小説複数人で1つの小説を順番に書き上げる」を始めたと知り、続きを書きました。それを読んだ友人が「小説家を目指してみたら?」とべた褒めしてくれて。これを機に小説を書き始めました。でも、全然書けなくて。ゼロからストーリーを作り出す難しさに、挫折しました。36歳で訪れた3回目の転機。「ふと」今の自分なら人生経験から何か書けるかもしれない」と思い、小説を書いてみたくて。それを小説のコンテストに応募したら初応募で1次選考に通過して。もしかして受賞のチャンスがあるのではないかと、書いては小説のコンテストに応募し続けました。そして、46歳のとき、ようやく小説家デビューするチャンスを手に入れた。「隠し玉に選ばれたと

知った当時は、うれしい気持ちの反面、大賞の受賞を逃した悔しさもありました。でも今は、隠し玉でのデビューを誇りに思っています」と振り返る。

どうして小説家になれたのか聞いてみた。「継続したからでしょう。皆さんも興味があるものがあれば、ぜひ始めてみてください。そして、少しずつでも、続けることがポイントです。それが実を結ぶとは限りませんが、続けた先で何かに役立つときがきつと来るはず。私が小説家になれたのも、働いて疲れたから1日くらい...とサボらずに、毎日1行でも小説を書き続けたからこそだと思っています」。

